

## 学生と教職員との協働による学生支援

— 入学前教育から始まる学生サポーターの取組 —

松久保 暁子・古川 健二

キーワード：ピアサポーター、入学前教育、学生支援、学生と教職員との協働

### 概要

基盤教育院では、学修面から学生生活面に至る学生支援を総合的に行う「コーナーストーンセンター」(=Cornerstone Advising Center 以下、CAC とする)を2007年度に設置した。CACでは「学生サポーター」(以下、サポーターとする)と呼んでいるピアサポーターと教職員が常駐しており、履修登録期間中は時間割の組み方などの履修に関するアドバイジング、それ以外の期間にはワークショップや座談会等のイベントの企画運営、学生生活を送る上で必要な情報をまとめた冊子であるハンドブックの作成など、学生の視点から学生生活のサポートを、年間を通して実施している。また入学前教育「ブリッジ・カレッジ」では学生スタッフとして携わり、入学を控えた高校生と交流を図ることで、入学後に気軽に相談できる環境を整えている。本論では、2010年度及び2011年度におけるCACでの学生支援の活動報告、教職員によるピアサポーターの支援体制を報告する。そしてサポーターの活動に、教員と職員が連携して積極的に関わることで、本取組が社会人基礎力<sup>(1)</sup>の育成に貢献している可能性を、サポーターの振り返りレポート、アンケート結果をもとに考察する。

## 1. はじめに

日本学生支援機構の調査によれば、ピア・サポート等の学生同士で支援する制度を実施する大学は、平成 17 年度は 12.9%、平成 20 年度は 21.3%、平成 22 年度は 35.6%と年々増加している。また、「未実施校に今後、ピア・サポートを実施したいか」という問いには 50.5%の大学が「実施したい」と回答している（日本学生支援機構 2011：75-76）。この調査結果からもピア・サポート制度が大学において注目されていることがわかる。

基盤教育院は主に 1 年次から 2 年次を対象とした全学共通教養プログラムを提供する組織として 2007 年に設立された。さらに学修面から生活面に至る学生支援を総合的に行う CAC を設置した。CAC ではサポーターが教職員と共に、オリエンテーション期間中には時間割の組み方などの履修に関するアドバイジングを行ない、授業期間中には窓口対応、ワークショップや座談会等のイベントの企画運営を行っている。また学生生活を送る上で必要な情報をまとめた冊子である学生生活ハンドブック（以下、ハンドブックとする）の作成、発行など、学生の視点から学生生活の支援を行っている。そして入学前教育「ブリッジ・カレッジ」では、学生スタッフとして携わり、入学を控えた高校生と交流を図ることで、入学後に気軽に相談できる環境を整えている。本論では、サポーターの成長を主眼に置き、(1)「ブリッジ・カレッジ」から始まるピアサポーターによる学生支援の活動報告、(2) 教職員によるピアサポーターの支援体制の報告、そしてサポーターの振り返りレポート、各種アンケートを分析することで、(3) 本取組がサポーターの社会人基礎力の育成の一翼を担っていること、そしてその実現のためには (4) 教員と職員が連携して積極的に関わる必要があることを明らかにする。

## 2. CAC の概要、学生サポーターの活動内容

### 2-1. CAC の教職員、学生サポーターの属性

CAC の活動に携わる教職員は、教員 2 名（専任助教）、職員 3 名（専任職員 1 名、パート職員 2 名）で構成され、来室する学生の相談に応じたり、CAC のサポーターの支援に取り組んでいる。CAC に常駐するのは職員 3 名で、教員は決まった時間に CAC に出向き、職員やサポーターと情報を共有している。また学修に関する相談は、原則として教員が担当している。

2011 年度春学期のサポーターは、リベラルアーツ学群の 2 年生、3 年生、4 年生がそれぞれ 1 名、ビジネスマネジメント学群の 3 年生が 1 名、4 年生が 2 名の計 6 名で構成されている。サポーターの応募は、公募と私募を併用し、第 1 次審査（書類審査）、第 2 次審

査（面接）を経て採用している。

## 2-2. 利用状況

2011年4月のCACの利用件数は164件で、中でも10日間行われたオリエンテーション期間および授業開始直後の相談件数が多い。相談内容は、オリエンテーション期間においては時間割の立て方や授業の様子など、履修に関する相談が大半である。またパソコンを使って履修登録を行うため、その操作方法を尋ねる学生も多く来室した。秋学期の利用件数は春学期に比べ減少しているが、相談内容は春学期と同様の結果となった。

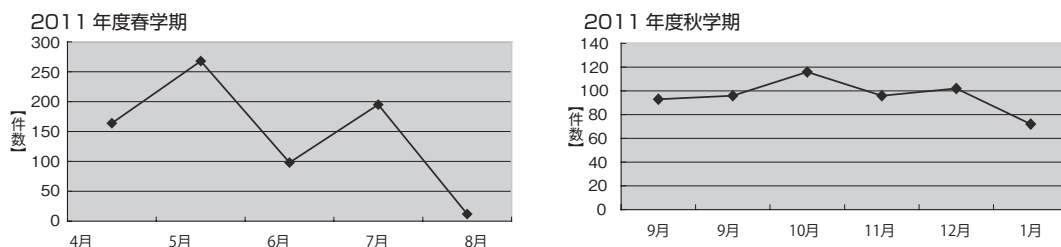


図1 2011年度 CAC 利用件数（オリエンテーション、授業期間中）

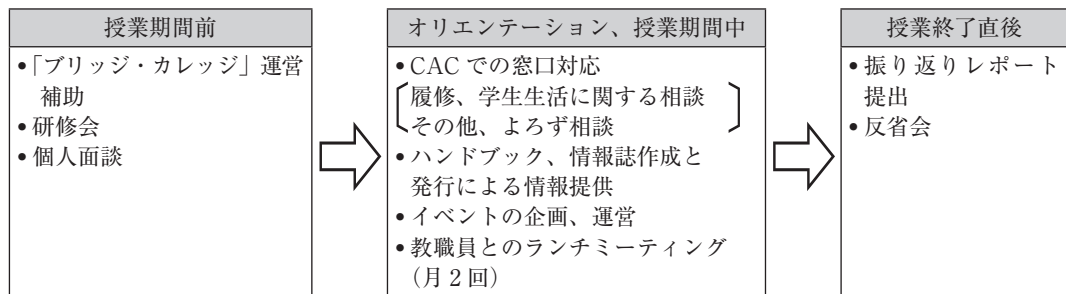
## 2-3. 活動内容

サポーターによる活動は表1「1年間の学生サポーターの活動」の通り、オリエンテーション期間に限定した履修相談といった単発的な支援ではなく、年間を通しての学生支援という点で特徴的である。そのため表1「1年間の学生サポーターの活動」で示されているように、在校生のニーズに対応するように学事暦に合わせて活動している。

CAC 開設当初は、履修相談と学修相談に重点を置いていたが、本学ではアカデミック・アドバイザー制度による専任教員の履修や学修に関するアドバイジングが充実していることから、CAC での活動は、ピアサポーターの利点を活かすべく、学生の視点から必要だと思われる学生支援活動に重点を置くようになった。そのため、オリエンテーションや授業開始直後は「履修や学生生活に関する相談やよろず相談などの窓口対応」に重点を置き、オリエンテーション終了後は「ハンドブック、情報誌の作成による情報提供」、「イベントの企画・運営」を行なっている。そして授業期間前は「ブリッジ・カレッジ」の運営補助に重点を置くようになった。

そしてサポーターが責任感を持って業務に取り組むように、「CAC での窓口対応」、「ブリッジ・カレッジ運営補助」に限り、アルバイト代を支給している。それ以外のイベント運営、ハンドブック作成に対しては、原則としてアルバイト代を支給していない。これらは教職員が指示して行うのではなく、サポーターが主体的に行う活動と位置付けているか

表 1 1年間の学生サポーターの活動



らである。

### 2-3-1. 研修会

CACでの窓口相談を行うために必要な情報や知識の共有を目的として、朝から夕方にかけて1日で研修会を実施している。2011年度秋学期の研修会のスケジュールは表2の通りである。研修会では教職員による説明は必要最小限にして、主にグループワークやロールプレイを用いている。例えば、時間割を組み立てる際の注意点を教職員が説明するだけでなく、サポーターが履修ガイドや時間割を見ながら、実際に1年生の秋学期の時間割を組み立てていく。その過程でサポーター自らが注意点を発見できるような「しかけ」を施している。さらに2011年度秋学期は本学の心理カウンセラーを講師として招き、カウンセリングの手法を交えた学生対応のアドバイスを受けた。さらに実際にロールプレイをすることで、窓口対応にも活かせる内容とした。そのためサポーターそれぞれが積極的に取り組んでいる様子が伺えた。

表 2 2011 年度秋学期 学生サポーター研修会 スケジュール

研修内容	方法
《第1部》時間割の組み方、よくある質問、学生サポーターの心得	
【1】時間割作成の流れと必要な資料、今年度からの変更点 コア科目の再履修手続	教職員による説明
【2】1年生の秋学期の時間割を組み立てる。(リベラルアーツ学群)	グループワーク
【3】1年生の秋学期の時間割を組み立てる。(ビジネスマネジメント学群)	グループワーク
【4】よくある質問への対応	グループワーク、ロールプレイ、教職員による説明
【5】履修相談の注意点、学生サポーターの心得など	教職員による説明
《第2部》学生対応のアドバイス	
学生相談室のカウンセラーによる学生対応、コミュニケーション講座	ロールプレイ、カウンセラーによる説明



写真1 研修会の様子

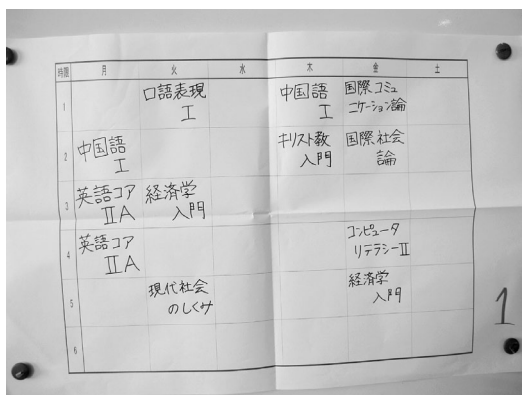


写真2 サポーターが作成した時間割

本研修会後に行ったアンケート結果から、CACでの学生対応のみならず、自身の対人関係を向上していく要素にもなっていることがわかる。

Q.「第一部」の内容は、CACでの学生対応に役に立つと思いますか。1～5のいずれかを選んでください。(N=7)

5. とても役に立つ：4名、4. 役に立つ：3名、3. どちらともいえない：0名、2. あまり役に立たない：0名、1. 全く役に立たない：0名

Q. 特によかったところ、役に立ちそうだったところがあれば、具体的にお書きください。(自由記述)

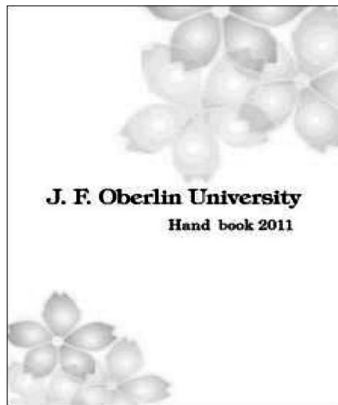
- 学生サポーターとしてはもちろん、私自身とても勉強になりました。具体的な例を入れてくださったり、自分たちもロールプレイを体験して、より学生相談に緊張感をもって臨むことができそうです。
- 今まで「学生サポーターとして何かアドバイスをしなければ!」と思っていたので、「相手の話を聞き、まとめる。質問し返す」ことも大切なんだとわかり、今後の参考になりました。
- 時間割の組み方やFAQなど、ようやく自分の中で自然と理解できるようになりました。覚えたマニュアル通りだけでなく、自分の中での言葉で説明できるようになりつつあります。
- 履修相談(よくある質問等)や時間割の組み方は、CAC内で確実に必要な内容なので、具体的なグループワークや模擬相談などはとても役に立つと思います。

#### 2011年度研修会実施後のアンケート結果(抜粋)

### 2-3-2. ハンドブック、情報誌作成

ハンドブックは、毎年度4月の発行に向けて、秋学期の授業開始後から企画し、約半年間かけて作成している。学生が在学中に困らないような様々な情報をまとめているが、その掲載内容から体裁などすべてサポーターの手によって作られている。そして、4月のオリエンテーション時に新1年生全員に配付している。

また、「えだまめ」と呼んでいる情報誌を学期に1回(年2回)を目途に発行している。イベントの告知や報告に関する内容が主であり、ハンドブック同様サポーターが作成している。



目次

- 学生生活に役立つ情報
  - ・時間割を作成しよう！
  - ・こんな時どうすればいいの？
  - コラム：e - Campus は大事！
- 学内情報
  - ・学内施設の場所・開室時間・連絡先
  - ・証明書発行
  - ・コピー機・公衆電話・自動販売機設置場所一覧
  - ・コンピュータ関係の施設設備
  - ・おすすめスポット
  - コラム：語学学習をするには？
- よくある質問
- Memo
- 時間割表
- 学園バス時刻表
- 学園マップ

2011 年度版 ハンドブック表紙と目次

### 2-3-3. イベントの企画、運営

「在学生に充実した学生生活を送ってもらえるような内容」を念頭に、教職員と協議した上で、サポーターが企画運営し、実施している。2010 年度は 6 つ、2011 年度は 3 つのイベントを実施した。

そしてイベント実施後、企画から運営に至る過程でよかったところや改善すべきところをまとめた報告書の提出を求めている。また各イベントでは参加者に対してアンケートを実施しており、報告書とアンケート結果をもとに、教職員とサポーターとで改善点等を話し合い、次のイベントにつなげるようにしている。

表 3 2010、2011 年度実施イベント

実施時期	イベントタイトル
2010 年 5 月	大学生活をもっと楽しもう
2010 年 6 月	ランチタイム座談会「就職活動で内定を勝ち取った先輩との話」
2010 年 7 月	ランチタイム座談会「英語と留学について」
2010 年 11 月	ランチタイム座談会「ためになる！先輩の体験談♪」
2010 年 12 月	ランチタイム座談会「就職活動で内定を勝ち取った先輩との話」
2010 年 12 月	就活！座談会
2011 年 6 月	七夕まつり（茶道部との共催）
2011 年 11 月	本に出てくる料理を作ってみよう！
2011 年 12 月	就活！座談会



写真3 2010年11月「ランチタイム座談会」の様子



写真4 2010年12月「就活!座談会」の様子



写真5 2011年6月 七夕まつりの様子



### 3. 入学前教育「ブリッジ・カレッジ」

#### 3-1. 「ブリッジ・カレッジ」とは

ブリッジ・カレッジは、高校生活と大学生生活の橋渡しをするための入学前教育として、2007年度より実施している。これから共に大学生生活を送る仲間や教員、在校生と出会い、4月からの大学生生活をスムーズに始めることを目的とし、2日間実施している。2011年度プログラムの内容は表4の通りである。

表4 2011年度「ブリッジ・カレッジ」スケジュール

#### 【1日目】

1時間目	ガイダンス「桜美林を知ろう」
2時間目	英語コミュニケーション
昼休み	昼食
3時間目	1年生の授業を体験しよう
希望者のみ	アクティビティ(アイスブレイキング)

#### 【2日目】

1時間目	日本語コミュニケーション
2時間目	大学の学びで広がる世界 「在校生からのメッセージ」
昼休み	在校生との昼食
希望者のみ	留学・体験学習の個別相談
	さくら〜にんぐ説明会・個別相談
	個別相談(大学生生活に関する相談)

### 3-2. ブリッジ・カレッジでの学生サポーターの役割

ブリッジ・カレッジの実施にあたっては、教職員に加えてサポーターも運営に携わっている。実施初年度である 2007 年度は誘導や受付などの補助が主な役割だったが、参加者によるアンケート結果から「在校生ともっと触れ合う機会がほしい」、「授業や学生生活の様子を聞きたい」といった要望が多数あることがわかった。そのため、2009 年度からアイスブレイキングの要素を取り入れた「アクティビティ」の進行役をサポーターが担当した。そして 2010 年度からは「アクティビティ」のプログラム開発から当日の進行までを手がけるようになった。さらに、2 日目の昼休みに「在校生との昼食」の時間を新たに設けて、高校生と共に昼食を食べながら、学生生活などを気楽に話せる機会を設けた。

また、これまではサポーターは教職員によって決められた手順に従って受付や誘導の補助をしていたが、2011 年度からは学生が準備段階から携わり、手順もすべて学生が決めを行った。

図 2 に示されているように 2011 年度ブリッジ・カレッジ参加者へのアンケートの中で「特に印象に残ったのはどの部分でしたか（複数選択可）」の結果から、1 クラス 30 名で 90 分間の授業を実施した「英語コミュニケーション」と「日本語コミュニケーション」が最も高いことがわかる。その他、教室内での講義や演習以外のプログラムでは、サポーターも加わって行った「アクティビティ（希望者のみ参加）」、「在校生からのメッセージ」の数値が高いことがわかった。また自由記述回答では、「アクティビティや昼食で在校生と話すことができよかった」というコメントが多く見られた。以上の参加者によるアンケート結果からも、サポーターが積極的に関わることで、プログラムの内容がより充実したものになっていくことがわかる。



写真 6 アクティビティの写真



写真 7 在校生との昼食の写真



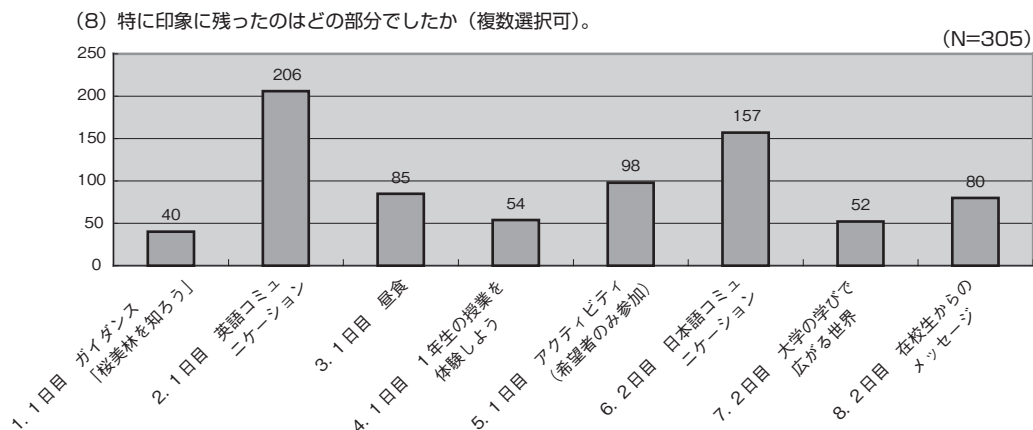


図2 2011年度ブリッジ・カレッジ参加者へのアンケート結果 (抜粋)

### 3-3. アンケート結果からみる学生スタッフの活動の意義

ブリッジ・カレッジ終了後、学生スタッフを対象にアンケートを実施した。その結果、すべての学生がこのブリッジ・カレッジを通して勉強になったと感じ、自分自身が成長したと感じていることがわかった。

また自由記述の回答から、プログラムを運営する上でのチームワーク、コミュニケーションの大切さ、社会に出てからも役に立つ経験だと認識していることがわかる。

<p>Q. ブリッジ・カレッジを通して、勉強になったこと、ためになったことはありますか。また自分自身が成長したなど思いましたか。(N=11)</p> <p>1) 勉強になった、ためになった: 11名が「はい」と回答      2) 自分自身が成長した: 11名が「はい」と回答</p> <p>Q. 具体的にどのような部分が勉強に(ために)なりましたか。またはどのように勉強に(ために)なりましたか。(自由記述)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 社会体験の一つとして、やはり多くの人と接して、各方面の能力が鍛えられた気がします。よい仲間もできて、みんなと一緒にチームワークして、このプログラムの運営を円満にするということ自体はとても楽しいです。</li> <li>• 太平館のホールで、200人を目の前にして話せることなんて滅多にない機会。緊張したが、こんなに大勢の前で話しするのは自信につながったし、社会に出るときに「こんな経験したから同じように乗り越えられる」と考えることができそう。</li> <li>• 1つの行事をみんなで協力してやり遂げるといったことがとてもためになったと思います。自然とみんなでもコミュニケーションも取れたので、良かったと思いました。協調性って大事なんだなと改めて感じました。</li> </ul>
--

2011年度学生スタッフへのアンケート結果 (抜粋)

## 4. 教職員による学生サポーターの支援

### 4-1. サポーターの活動内容と学習状況の確認

CACは職員が常駐する事務室内に設置されているため、サポーターの窓口対応などの日常業務を教職員が随時確認することが可能となっている。また授業期間中には隔週で昼休みのミーティング、授業開始前には研修会を実施している。そして学期末には、学期中の活動の反省点や次学期の課題を「振り返りレポート」に記入することで、自身の活動の振り返りを促し、次学期の活動につなげている。

そして、そのレポートと個人の成績表をもとに教職員による個別面談を行ない、学業が疎かにならないよう、個々のサポーターの活動や学習状況を確認している。

またイベントはサポーターが中心となって立案し、企画書、広報、イベント運営、振り返りのそれぞれの段階で、教職員が確認し、必要に応じてサポーターに助言をしている。

### 4-2. ファシリテータとして留意していること

イベント、ハンドブックや情報誌作成などのサポーターの取組は、上述のようにサポーターが主体的に行うという姿勢に立ち、教職員側の考えをサポーターに押し付けるのではなく、サポーターの主体性を重んじながらも、様々な場面で支援、指導をするように心がけている。その一方で、サポーターの様子を観察してみると、サポーターの成長を促すには全てをサポーターに任せるのではなく、教職員による支援や助言、指導が必要だと思われることが多々あった。そして、活動を進めていく中で失敗することも多々ある。そのような場面でも、失敗しない方法を提示するのではなく、なぜ失敗したのかをその都度サポーターに振り返りを促し、解決方法をサポーター自身が気づくように仕向けるよう心掛けている。その点からも、それぞれの活動を振り返ること、そして学期末に行っている「振り返りレポート」は重要である。

このような体制でサポーターの支援が可能となっている主な要因として、(1)CACでの学生支援の目的を教職員、サポーター全員が共有する、(2)全員で全ての活動に取り組む、(3)責任感を持って取り組むように、サポーター一人ひとりに役割を与える、(4)半年ごとに活動を振り返る、(5)教職員が常にコミュニケーションを図り、些細な出来事でも共有できるような信頼関係の構築が挙げられる。

そして日々のサポーターの業務確認の他に、「振り返りレポート」や「個別面談」により、個々の学生の取り組む姿勢やCAC以外での学習状況、生活状況などを把握することも重要だと考えている。また年に2回の研修会直後のアンケート結果をもとに、次の研修会の内容を教職員で何度も検討し改善している。このような積み重ねによって教職協働が実現できているのではないだろうか。

### 4-3. 学生サポーターの「振り返りレポート」からわかること

サポーターには毎学期末に自身で活動を振り返る機会を与えるため、振り返りレポートの提出を求めている。その自由記述には、自分たちが在校生の役に立っていると実感し、やりがいを持って取り組んでいる様子がわかる。このことから、CACでの活動はサポーターの成長につながることを示唆していると言える。

Q. コーナーストーンでの活動の中で、最も頑張ったこと、そしてやりがいを持って取り組んだことを具体的に書いてください。

- イベント「就活！座談会」を企画・運営したこと。学生さんの役に立ち、コーナーストーンセンターで自分の仕事を早くやりたかったので、とにかく企画・準備・当日の運営まですべて頑張った。
- 参加者の学生さんたちの満足度が高く、すごくやりがいを感じ、またイベントの企画をしたいと思った。
- ありがたいことに、コーナーストーンでは学生の活動を支援してくれる環境が整っています。これは本当に心強いことだと考えています。恵まれた環境に感謝し、だからこそ頑張れる、頑張らなければならないと考えています。
- イベントを企画、運営したことで、当初の目標だった「学生と大学の両者に貢献」が実現できたと思う。
- ハンドブックの作成の担当になり、受け身ではなく積極的に活動できた。

2011年度 「振り返りレポート」の自由記述（抜粋）

## 5. まとめと今後の課題

### 5-1. ピア・サポートの有効性

大学でのピア・サポートの狙いについて、土屋（2010:31-32）は「社会人基礎力を養成すること」と述べている。「2011年度学生スタッフへのアンケート結果」の中の「自信につながった」、「協力してやり遂げた」、「協調性が大事だと改めて感じた」というコメントや、「2011年度『振り返りレポート』の自由記述」に見られる「イベントの企画・準備・当日の運営を全て頑張った」、「目標が実現できた」、「受け身ではなく積極的に活動した」というコメントから、年間を通して教職員と共に活動を行うことにより、社会人基礎力が身につけていることがわかった。また日本学生支援機構が実施したピアサポーターに関する調査の中で、ピア・サポートを実施した結果「学生の能動的態度やコミュニケーション能力が高まった」という回答が86.5%にも上っていることが明らかになった（日本学生支援機構 2011：78）。この調査結果や上述の振り返りレポート、ブリッジ・カレッジのアンケートからもわかるように、CACでのピアサポーターの取組みは、サポーターの能動的な態度、コミュニケーション能力の育成に有効であることが明らかである。

そしてサポーターの成長を促すためには、「(4-2) ファシリテータとして留意していること」でも述べたが、それぞれの活動の過程を教職員が確認し、サポーターの主体性を重

視しつつ、必要に応じて助言や指導を行うことが重要である。つまりピアサポーターの制度を導入するだけでなく、それを支援する教職員の力が何よりも必要なのである。

### 5-2. 教職協働の重要性 ～正課外だからこそできること～

CACでは、教員だけでなく職員も学生指導を行い学生の成長の一翼を担うことが大きな特徴ともいえる。日本学生支援機構(2011:89)の中で「学生リーダーシップ養成プログラムの運営・指導においては、教職協働体制が取られているケースが非常に多い」と述べられている通り、教職協働が重要であることを示している。CACではその教職協働が確立されており、それが大きな強みといえる。教員と職員とが密接な連携をすることで、きめ細やかな支援を実現し、学生の成長につなげていくことができるのである。

なぜこのような連携による学生支援が実現できたのだろうか。その要因の1つとして、教員と職員との役割分担を明確にしなかったことにあると言える。正課外だからこそ実現できたと言えるが、教員と職員とが同じ目標に向かって、共に考え、議論し、行動することこそが、真の教職協働だと言えよう。ピアサポーターを含めた正課外の取組が注目される中で、このような教職協働がさらに求められるだろう。

### 5-3. 今後の課題

今後の課題は、学生が社会人基礎力を身につけたことを示す客観的な評価指標を構築することにある。また、日本学生支援機構(2011:78)が実施した学校を俯瞰して判断でき学長・副学長等を対象としたピアサポーターに関するアンケート結果によると大学全体で74.6%が「拡大したい」と回答し、24.7%が「現状維持」と回答している。この結果からも、各大学がピア・サポート制度へ大きな期待を持っていることが確認できる。本学においてもこの活動を更に発展させていく必要があるが、そのためには、活動に携わる教職員を安定的に確保していくことが重要になってくる。

なお、本論は2011年9月1日に久留米大学にて開催された初年次教育学会第4回大会における口頭発表に、その後の成果を踏まえて加筆訂正をしたものである。

### 注

- (1)「社会人基礎力」とは「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が2006年から提唱している。「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力から構成されており、さらにこれを12の能力要素に細分化されている。

## 引用(参考)文献

Masayuki Adachi, Akiko Matsukubo, Kenji Furukawa. 2010. “Bridge Program: Helping Students Make Smooth Transition from High School to University” 17th National Conference on Students in Transition. Texas, USA.

日本学生支援機構, 2009, 『大学、短期大学、高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査 (平成 20 年度)』

日本学生支援機構, 2011, 『大学、短期大学、高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査 (平成 22 年度)』

土屋貴之, 2010, 「ピア・サポートの可能性」『大学と学生』 11 : 30-31